

研究ノート

サードプレイスに尽力する人たちのライフストーリー研究 1 — サードプレイスの構築過程に着目して —

平 野 知 見

I はじめに

昨今、家庭の状況により不利益や困難を抱える子ども、今までの人間関係がなくなり人と出会う場がなくなったリタイア後の高齢者、様々な理由で学校に登校していない子どもやその保護者、そして日本に居住する外国にルーツのある子どもや大人などの多様な人々の共生を創造するサードプレイスの必要性が問われ、そのような人々のためのサードプレイスが全国で様々な形態によって運営されている。

一方で運営の継続や人材の確保の難しさが現実にある。これらを解決するためにはどうすればよいのだろうか。それらの考察のために、筆者は10年以上実際にサードプレイスの運営をしている人たちを対象とするインタビュー調査を行い、運営者（実践者）のサードプレイス構築過程を分析することにより、サードプレイス運営に必要な人材やその役割とは何かの考察を試みた。本研究の目的は、サードプレイスに尽力する人たちのライフストーリーの分析から、設立当初の動機や価値観が変容するプロセスをたどり、運営・実践の継続に資した要因を明らかにすることである。

研究結果を述べる前に、日本内外に関するサードプレイス研究の先行研究、そして近接領域に関する先行研究をまず概観する。

1. 諸外国におけるサードプレイス研究

家庭や仕事場以外の公共空間という考え方は、長年にわたってさまざまな分野の研究者が注目してきた。Wechsberg (1966) は「喫茶店が人に安らぎを与える」と述べ、Goffman (1971) は、個人と社会にとっての公共空間の利点について言及した。一方で、Oldenburg (1989) は、「グレート・グッド・プレイス (The Great Good Place)」の著作で初めて、家庭や職場以外のサードプレイスの定義を紹介した。Oldenburg (1999) の定義によれば、「人生における第一の重要な場所は『家庭』であり、第二は『職場』であり、第三は『社会的相互作用を提供する公共空間』である」とされる。またサードプレイスの特徴として以下の8つをあげている。サードプレイスとは、(1) 誰のものでもない中立的な場所であり、(2) すべての人を受け入れるものであり、(3) 社会化、コミュニケーションが主な活動(4) アクセスしやすい(5) 常連客で目立つ(6) 社会的な絆で結ばれている(7) 楽しみを提供する(8) 心理的な安らぎと感情的な支えを提供する (Oldenburg 1999; Mehta & Bosson, 2010)。

しかしながら Rosebaum (2007) は、「サードプレイスをどう定義するかは、その人の背景や経験が影響する」とも指摘している。

上記の8つの特徴を持ち備えた場合はサードプレイスとなり得るということになるが、具体的な例として、環境や施設面から特定されたサー

ドブレイスは、コミュニティ・センター、カフェ、バー、レストラン、ショッピングセンター、市場、美容院、商店、レクリエーションエリア、スポーツ施設、アートセンター、礼拝所、図書館、オープンスペース、海岸線が挙げられ (Jeffres et al. 2009; Rosenbaum et al. 2007; Crick 2011)、Cheang (2002) は、コーヒーショップがサードプレイスによく利用される場所であることを強調している。Rosenbaum et al. (2007) によると、オフィスにかかる費用を捻出できない人や、喫茶店をリモートオフィスとして利用する人は、一日中、定期的にコーヒーショップで仕事をするなど、サードプレイスとしてのコーヒーショップが自宅より多くの心理的支援を提供できる可能性がある。Fornier and Lee (2009) は、サードプレイスは消費者との帰属意識を高めてこそ成功すると述べている。Slater and Koo (2010) は、アートギャラリー、博物館、展示会を新しいサードプレイスと定義している。Mikunda and Blomen (2006) は、サードプレイスは一般的に営利事業であり、他の年齢層よりも若者の興味をひくと述べている。Lee and Ma (2012) は、オフィスからリモートで仕事をするような習慣が、喫茶店、レストラン、ホテルのロビーの利用を増加させていることを発見した。DeCava (2006) は、ワイヤレスネットワークと電力のサポートにより、これらの場所は人々にとって非常に頻繁に利用される場所になったと述べている。Steinkuehler and Williams (2006) は、オンライン・ゲームやソーシャル・ネットワーキング・サイトを代替的なサード・プレイスとみなしている。

オーストラリアのサードプレイスに関する調査研究においても、Archer (2017) は西オーストラリア (WA) 州における、幼い子どもをもつ母親のソーシャルメディア利用に関する実証研究について議論している。21 世紀のオー

ストラリアでは、男性よりも高い進学率を達成する若い女性が増えているにもかかわらず、専業主婦・パートタイムで働く母親とフルタイムで働く父親が当たり前の存在であり続けているという。女性は第一子の出産後、大きな変化を経験し、しばしば孤立し、新しい役割の中で多くの初産婦は、コミュニティとのつながりを求めて連日ソーシャルメディアにアクセスしているという指摘であった。この調査研究は、西オーストラリア州 (WA) の農村部と大都市部のブレイグループで、10 グループを対象に調査を実施した。利用されているソーシャルメディアはフェイスブックが圧倒的に多く、90% 以上の母親がフェイスブックの利用を報告した。利用の主な動機は、外界との接触を維持すること、家族や友人と連絡を取り合うことであった。また、母親たちはフェイスブックを退屈しのぎに利用したり、ニュースや友達を含む人々の動向をチェックしたり、企業やブランドをフォローするためでもあった。もちろんソーシャルメディアは多くの恩恵をもたらすが、母親たちは「見逃すことへの恐れ」(Fear of missing out : FOMO) も感じており、サードプレイスの暗黒面について深刻な懸念が示された (URL 1)。

2. 日本におけるサードプレイス研究

日本におけるサードプレイス研究として、小林・山田 (2014) がサードプレイスを 2 区分し研究している。若年者が地域社会に関心を持ち繋がるきっかけとなるサードプレイスの創出という目的のもと、交流の場としてのサードプレイス機能 (交流型) と自分の時間を過ごす場としてのサードプレイス機能 (マイプレイス型) を有機的に結びつけるサードプレイス創出モデルの検討を行っている (小林・山田 2014: 11)。

また、コロナ禍を過ごし SNS 含むバーチャルな空間でのやりとりも新たなサードプレイス

として位置づけられる傾向がより高まっている。例えば、すでに高谷（2019）は、SNS のサードプレイスとしての可能性について調査を行った。SNS の一つである Twitter が、現実社会では孤立しがちな子育て主婦にとって匿名で育児中のストレス発散や悩みを吐露することにより、相談する場となり、気軽に参加できるサードプレイスとして有効利用され、機能しているという実態を明らかにしたのである。このようにサードプレイスがハイブリッドで位置づけられ、一人の空間を保持し、バーチャルな空間で他者とつながっている形式もサードプレイスとして有効的な場かもしれない。筆者は本稿において SNS の発展前の時代にレイ・オルデンバークがサードプレイスを提唱した意味、著書の題名（邦訳）にもあるように「コミュニティの核になる『とびきり居心地よい場所』」に気軽に立ち寄ることができ、他者との対話がその核の大きな要素であるという立場でサードプレイスを位置付けることを前提とする。

3. 近接領域に関する先行研究

① 多様な「居場所」の意味

日本において近年「居場所」という言葉がサードプレイスと近い意味合いで使われ、その多様な居場所に関する研究が盛んとなっている。まず居場所とは何か。『広辞苑』デジタル版によると、「いるところ。いどころ。」と説明がなされており、デジタル大辞泉（小学館）では、居場所は「(1) 人などがいるところ。いどころ。(2) その人が心を休めたり、活躍したりできる環境。」と記されている。この (2) については、人の心理的要素や、主観的な考えも影響しているため、居場所の定義を明確に示すのは難しいと考える。一方で、居場所の特徴的な場の意味として表出されるのは、「安心・安全な場」、「居心地がよい場」、「否定されることなく受け入れ

てもらえる場」「ありのままの自分でいられる場」「他者とつながれる場」など、肯定的な意味としてとらえられる傾向があると言える。

② 居場所に関する学術領域を軸とした検討

初めに「居場所」自体は、社会教育の分野である青年期教育の中で展開されてきた。戦後は、農村部の勤労青年を対象とした青年学級や若者の文化運動が盛んであり、高度成長期は地方の中学を卒業後都市部に就職した若者を対象として、勤労青少年会館等が設立され、そこで様々な学習活動が展開されたという。しかしながら、青少年育成の視点では、今までの価値観を優先し上から彼らを育成するという姿勢が強固であったと述べられている（田中・萩原編 2012: 5）。1970 年代後半は「たまり場」づくりが盛んとなり、その意味は青年にとって定型的な学習機会の前後に実施される、正式な決まりごとなどないインフォーマルな語り合いの場である（那須野 1976）。また萩原（2018）は社会教育をふまえ、いじめや不登校、少年事件、「普通」でいることの生きづらさをめぐる子どもと若者の語りを通して、大人との関係性を見つめ、共に生きる方途を探索し「居場所」の意味を探索した。その「居場所」の意味と成立条件として次のように記した。(1) 居場所は「自分」という存在感とともにある。(2) 居場所は自分と他者との相互承認というかわりにおいて生まれる。(3) そのとき生きられた身体としての自分は、他者・事柄・物へと相互浸透的に伸び広がっていく。(4) 同時にそれは世界（他者・事柄・物）の中での位置感覚の獲得であるとともに、人生の方向の生成である（萩原 2018: 111）。

次に学校教育の領域から居場所研究について検討する。1970 年代半ばから「教育荒廃」を経て、学校が「居場所」でないという子どもたちが増加し、登校拒否、そして不登校が顕在化

した。1980年代に入ると学校が「居場所」ではない児童生徒のためにフリースクールが誕生し、「東京シュレ」や「フリースペースたまりば」などが代表的な「居場所」の形となった(柳下・高橋 2019:23-24)。この登校拒否、そして不登校の子どもが増加し、フリースクール等の学校外での「居場所」が広がると、臨床心理学領域からの研究も見られるようになった。中藤(2017)の「居場所」研究は、「居場所」概念がどのように心理臨床の実践に役立てるかについて追及している。

次に物的環境・空間の視点を土台に居場所を探究している建築学の領域ではどのように扱われているのだろうか。1990年代後半から「居場所」概念が社会に浸透するとともに、多様な「まちの居場所」がつくられてくるなど日本建築学会においても注目されてきたという(日本建築学会編 2019)。日本建築学会は、2010年に出版した『まちの居場所』の中で、多岐にわたる「まちの居場所」を紹介している。具体的には、高齢者施設、子ども家庭センター、フリースクール、雑居ビル、仮設住宅のカフェ、団地、アパート、プレイパーク、公園などであり、「まちの居場所」は一言で定義はできないということ、つまり多様な人が多様な理由で集まっている場、そして何をしに行くわけではないが、行けばいろんな人と出会い、いろんな活動に触れ、気がつけば人を迎える側としてふるまっている

かもしれない(日本建築学会編 2010:180)と述べている。その後、改めて「まちの居場所」をめぐる最新の動きを論じ、調査研究・実践事例を中心に「まちの居場所」をめぐる論考を通して、次の時代を切り開くための建築計画的・環境行動論的知見を示している(日本建築学会編 2019)。最後に社会福祉領域から、日本の高齢化社会に伴い、高齢者の「居場所」が増加している。また子どもの貧困や生活に困窮する人、障害のある人、外国にルーツのある人、認知症の人たちなど多世代において「居場所」を必要としている。一人ひとりの課題を解決するために、各地の社会福祉協議会や、公益財団法人の「居場所」に関するガイドブックが刊行されるようになった。このように居場所に関する学術領域(図1.参照)は多様であることがわかる。昨今では、子ども食堂や、生活困窮世帯の子どもへの学習支援なども「居場所」として位置づけられ、今後、彼らの支援者となる人材養成の展開に広がっていくだろうと予測している。

③ 先行研究における課題及び本研究の位置づけ

前述では、サードプレイス及び居場所に関する日本内外の先行研究を概観してきた。海外におけるサードプレイスの対象と、日本におけるその対象で大きく違うのは、「子ども」を対象として扱っているのかどうかという点である。

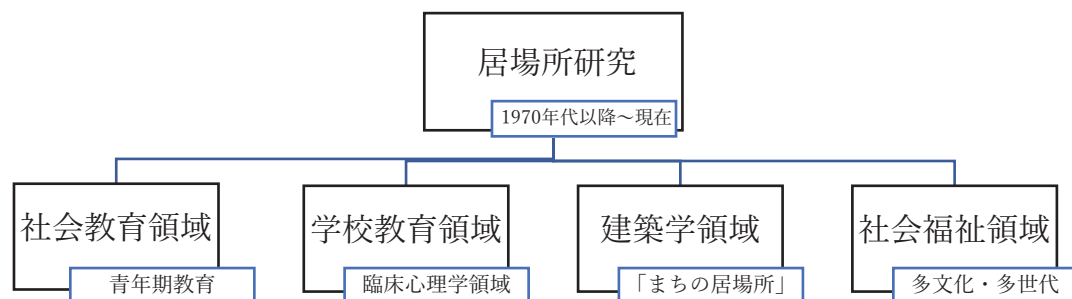


図1. 居場所に関する主な学術領域

諸外国の研究では、子どもではなく、「大人」を受益者として主体に考えている点に大きな違いがある。また両者ともに見逃されているのが、その「場」に関わる人材養成の視点である。多文化・多世代共生のもと、多様な背景をもつ子どもや大人の視点に立った多様なサードプレイスが構築されるためには、そこに関わる人材の養成は急務であるというのが課題として見えてきた。21世紀の今、日本に在住するすべてのこどもたちを取り巻く状況が安心安全で良好で過ぎているとは残念ながら言えない。それは連日こどもの虐待や貧困、いじめや不登校、ヤングケアラーなど、子どもをめぐる社会問題が報道されていることから顕著である。このような状況の中、2023年4月1日に「こどもまんなか社会」の実現を目的としてこども家庭庁が発足した。「こどもまんなか社会」とは、常に子どもの最善の利益を第一に考え、子どもに関する取組・政策を我が国社会の真ん中に据えることを意味している。また、子どもの視点で、子どもを取り巻くあらゆる環境を視野に入れ、子どもの権利を保障し、子どもを誰一人取り残さず、健やかな成長を社会全体で後押しするための新たな司令塔がこども家庭庁ということになった。これまで、子どもに関する取り組みは厚生労働省、文部科学省、内閣府など様々な省庁に分散されていたため、その弊害をなくすためにもこども家庭庁がそれらを一本化し、縦割り行政を解消することが期待されているのである。また、こども家庭庁が発足されたと同時にこども基本法が施行された。この法律は、こども施策の基本理念を明確にしたもので、国や自治体に対し、子どもや若者の意見を聞くことを義務付けている。また2023年11月30日付のこども家庭庁説明資料の中で、こども政策の新たな推進体制に関する基本方針では「全てのこどもが、安全で安心して過ごせる多くの居場所

を持ちながら、様々な学びや、社会で生き抜く力を得るための糧となる多様な体験活動や外遊びの機会に接することができ、自己肯定感や自己有用感を高め、幸せな状態（Well-being）で成長し、社会で活躍していけるようにすることが重要である。」ことを今後の基本理念としていと記載されている。つまり様々なニーズや特性を持つ子ども・若者が各々のニーズに応じた居場所が持てる社会の実現にむけて、彼らが安心して過ごすことのできる場の整備を推進するという。この現状を踏まえ、実際にサードプレイスを運営する人たちのライフストーリーを調査する。

Ⅱ 研究方法

1. 研究方法のについての視点

地域で10年以上サードプレイスの活動を実施している方のライフストーリー・インタビューを実施する。桜井（2012）は「ライフストーリーは、個人のライフ（人生、障害、生活、生き方）についての口述（オーラル）の物語である。また、個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的（ホリスティック）に読み解こうとする質的調査法の一つのことでもある。」（桜井2012:6）と述べており、サードプレイスの運営やそれまでの経緯や人材の重要な資質が明らかになるのではないかと予想した。また、サトウ（2009）は「ライフストーリー研究には、語りの内容に注目するものと、語りの型に焦点を当てるものがあり、…（略）…」（p.138）と述べていることから、本論では前者に着目する。

2. 研究方法

本研究では、サードプレイスを立ち上げた4

名の方にインタビュー調査を行った。この4名のインタビュー対象者は、筆者が行っているサードプレイス活動に賛同・理解を得ており、互いに信頼関係ができていると認識している方々である。本稿では、「語り手の発話を阻害しないように配慮しながら、比較的自由な会話にもとづいておこなわれる」(桜井 2012: 64) ライフストーリー・インタビューを実施することで、4名の豊富な語りを収集することが可能となった。よって本稿においては、4名の中でも教員経歴をもつ2名の運営者のライフストーリーを取り上げ(ライフストーリー研究1)、残り2名のライフストーリーについては、ライフストーリー研究2の論文内で取り上げさせていただく。サードプレイスの設立過程を分析するにあたり、児童養護施設出身者の居場所を立ち上げた東さん(仮名)へは、2023年11月14日に50分、子育てサークルを立ち上げた西さん(仮名)へは、2023年11月15日に55分の半構造化面接を実施した。調査協力者には、本研究への理解と調査協力の同意を得た上で、以下の質問項目を事前に配布した。

- ・サードプレイスをつくったきっかけ
- ・運営・実践するにあたり大切にしていること
- ・子ども、大人、地域と関わる上で大切にしていること
- ・サードプレイスを運営するにあたり心や言動の変化など
- ・自身にどのような役割が期待されていると思うか
- ・継続していくためにどのような人材が必要か

面接を録音し、逐語録を作成した上で、ストーリーラインに沿った聴取内容の要約を行い、要約に基づいてサードプレイスの構築過程に着目した説明図を作成する。

3. 倫理的配慮

調査協力者のライフストーリーを語ってもらうため、可能な限り協力者が安心・安全な場でインタビューを実施した。またインタビュー内容については、京都文教大学「人を対象とする研究」審査委員会(京文大 23 第 1692)により承認された。本論におけるインタビュー内容の記述については、個人が特定されないように極力配慮し、最終的に本論の記述内容を調査協力者に読んでいただき、掲載への同意を得ている。

Ⅲ インタビュー分析

ライフストーリー分析は、個人の語りを通じて人生や経験を理解し、社会や文化の諸相を読み解こうとする質的研究方法(桜井 2012:6)であり、個人の語り、つまり個人的経験の表出としてのライフストーリー(大久保 2009)や語り手による経験の意味づけと人生全体の意味の変化(中尾 2021)が主な分析の視点である。また録音データの文章化(トランスクリプション)を行った上で、加工の方針(大久保 2021:30-32)を参照し、出来事や人物で表示するとわかりやすいことから、適宜小見出しを付けた(大久保 2021:32)。上記の方針を参考に、本研究で調査対象とした2名の方について、それぞれのプロフィールなどを紹介し、インタビューの概要を、聞き取った内容・項目毎に要約した。更にインタビュー内容に基づいて、ライフストーリーからみる生涯学習と人生の出来事の関係性を描いた図を提示したもの(杉浦 2024)や対象者の様々な出来事経験を記載した人生年表(大久保 2009:24-25)、事例の要因関連を図示したもの(大久保 2009:84)など、対象者のライフストーリーの全体像を視覚的に理解することができる。よって、それぞれが立ち上げたサードプレイスの構築過程に関する説明

図を作成し、インタビュー分析を試みる。

1. 東さんの事例

① 東さんについて

大学卒業後、教育機関、児童福祉機関で就労。その後大学院を修了し、現在は大学の教員である。調査者とは互いに教員養成関連に携わりながら16年ほどつながりがある。他者からの人望が厚く、人情味あふれた人柄で、どんなに多忙であっても、必ず知り合いや学生などが主催する行事や取組等には顔をだすという義理堅い人である。

しかし一方で、個人的な人生経歴はあまり話されず、サードプレイス設立等に関する詳細を語られることはなく、こちらから詳しく尋ねることもなかった。今回のインタビュー調査は、東さんがどのような経験をし、どのような活動を通して何を感じてきたのかを改めて尋ね知りたいという、調査者の強い関心が調査の出発点でもあった。

こども家庭庁は、「社会的養護」を「保護者のない児童や、保護者に看護させることが適当でない児童を、公的責任で養育し、保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うもの」と定義し、「こどもの最善の利益のために」、「社会全体でこどもを育む」という2つの理念に基づくものとした（こども家庭庁 2024）。そして、社会的養護が終了した施設出身の若者に対して、県の委託事業として「居場所提供事業」が開始される。

② インタビューの概要

【サードプレイス設立のきっかけ】

児童養護施設出身者を対象としたサロン活動は、県からの委嘱事業。委嘱を呼びかけられた時、そのような活動の必要性は感じていたが、他に引き受け手がなかったので、私が引き受け

た。県の「社会的養護の居場所提供事業」は、児童養護施設出身の若者の居場所が必要だという事業。私は、受託以前に、県内の児童養護施設を退所する直前の高校生が、交流する会にも参加していた。一つの施設だけでなく、複数の施設で、施設を出ていくための準備の一環である「リービングケア」をやっていた関係があって、施設を出た後の支援にも関わるようになった。それがきっかけだった。

【サロン活動】

活動は、一般マンションの一室を借り、月1回の食事会。一般的な子ども食堂とは少し違い、かなりクローズな、誰でも来る事はできない食堂になっている。サロンのスタッフは、児童福祉施設での就労経験のある専門職の方に料理を作っていた。いてる。

1度の参加人数（スタッフと来られる方）については、おおよそ若い人2名に対し大人1人の割合で、15名程度（最近多くて20名近く）で調整している。建物条件から人数制限せざるを得ない。

【終結のない取り組み】

児童相談所などの相談は（児童養護施設の場合は微妙だが）、相談を受け付けて、必ず終わりがあ。例えば年度末で終結されるとか、18歳で終結になるとか。問題が解決していないのに、行政的に終結してしまう。学校は卒業で終わり。施設も退所すれば終わり。しかし、私達は基本的にエンドレス（終結がない）。当事者が拒否すれば関係の継続は無理だが、拒否されない限りエンドレス。だから永遠に人が増えていく。それを前提に、細く・長く・ずっと関わりがあり、終結は基本的にないということを前提に、長く関わっていく。自らの活動を「京都銀行方式（京都銀行のCMで「ながーいお付

き合い」というキャッチコピーがあることから)」と呼んでいる。

【人生を通して支援が必要】

かつて私が児童相談所や児童養護施設で関わっていた子どももそれなりの年になり、それぞれの人生の節目を迎える。例えば入学・卒業・就職・(早期)退職や、親が死ぬなどの節目を迎えると、やはり大変だろうと感じる。彼らには家庭というものがなくて、どうしたらいいかわからないようなことが、一般の方とは少し違うところで起こってくるのだろう。

年齢とともに、結婚・出産・子育て…と続くが、その時には、彼ら自身の子ども時代のことが思い出されてくる。この流れには終結がなく、その人の人生に沿って、ずっと関わっていくことになる。

特に大変なのが親の介護。かつて虐待された親の介護をしなければならない。永らく離れて暮らしていても、親が高齢になると、やっぱり一緒に住まなければだめだと思って一緒に住む。しかしその時には認知症とか、いろんな状況で、いろんなお世話をしなければならない。

そして親が死ぬと、葬式や相続も大変。時には巨額の負の遺産があったりするので、そのような場合には、法的サポートが必要。心理的にも大変だ。ライフステージのそれぞれの時が、その都度大変だと思う。

【サードプレイス活動へのモチベーション】

教職経験(非常勤講師)時、有名進学校と、3分の2が中退していく高校に同時に就労したことがある。多様な生徒の現状を見て、自分自身がもう少し勉強をしなければと思い、大学院進学のことを考えた。

しかしその後の職業選択は、いつも受け身的だった。児童福祉機関への着任は、大学院の指

導教官が児童福祉機関の出身で、その教官からの勧めがあったから。

サロン活動は、大学教員になった後の活動。私1人では無理だと常に思う。(活動へのモチベーションを尋ねられているが)、例えば食事を作ってくださる方の場合、「美味しい」、「今度はこれ作って」と言われることだと思う。私の場合、サロンにずっと継続して来てくれることや、近況をいろいろ聞くことができることだろうか…。そのために、月1回の定期開催を続けている…。「生きてたらいいやん」みたいな感じになって。それと、「たまに美味しいもの食べれたら、それでいいかな」みたいな…。

【サロン活動の特徴】

サードプレイスにはいろんなタイプがあるが、この活動はどちらかというと「会員制クラブ」みたいな感じ。活動の性質上、フリーに誰でも来ることはできない。ひとり一人のことについて、丁寧に関わり、サポートしていく。その上で、その方々の居場所みたいな感じになるから、幅広く誰でもOKという感じとは少し異なる「クローズド」なところが特徴。

かなりの守秘義務が必要。支援者の特性上、「トラウマ・インフォームド・ケア」のような感じ。基本的にみんなトラウマティックな体験をされている。だから、それらに配慮した働きかけが前提になってくる。

【サロン活動の中に受け入れる】

メンバーは会員制だが、その日来られるメンバーの組み合わせで、マッチングが悪い場合や、今悩みを抱えている場合などもある。そんな時は、スタッフに対して、把握している個人情報を詳しくは伝えないが、活動開始前に打ち合わせをする。そんな時に、メンバーが抱えている課題が自然な形で、活動の中で話題にできる時

もある。

参加メンバーは、自分たちだけがしんどいと思っている。そんな時は、スタッフ自身がしんどいと思っていることを、ストレートに語ってもらう。そのことで、世の中の人ほとんどがみんな結構しんどいという認識に拡がり、何か語りやすくなるような雰囲気が出てくる。意図して行っているわけではないが、スタッフ自身が率先して自分の私生活も含めてさらけ出す事の効果は大きい。

③ インタビュー分析

インタビュー結果から、東さんのサードプレイスの構築過程をまとめたのが図2である。インタビューから、以下のことを読み取ることができよう。

東さんが語る「社会的養護」とは、「保護者のない児童や、保護者に看護させることが適当でない児童を、公的責任で養育し、保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うもの」と定義し、「こどもの最善の利益のために」と「社会全体でこどもを育む」という2つの理念により行われている（こども家庭庁 2024）。A県の「居場所提供事業」については、情報などが無い中、東さんが引き受けることになったと語ったが、それ以前に施設を出る前の高校生らとの交流会には参加し、加えて「リービングケア」に携わっていた経緯もあったということもあり、その事業の必要性を強く感じていたことが読み取れる。

東さんは全国的な状況も理解した上でA県の現状を語り、施設が集まる会において各施設の課題解決にむけて話題提供をしながらサポートを考えるというプロセスを述べた。そして、法律に強いXさんとの出会いについては、東さんが児童相談所、その後の施設勤務の時から、

長きにわたり社会的養護の子どもたちとかのサポートをされていたということ、そして東さんがスクールソーシャルワーカーやカウンセラーをされている際のケースについて、親の弁護や、子どもの方の代理人で就かれたのがXさんであったという繋がりを語った。

また、東さんの縁ある方々とともにサロン（月1回の食事会）を開いておられ、参加人数の増加に伴い、場所が変わったとのことだった。サロンが「クローズド」であるというここでの意味合いは、スタッフと参加者が顔のわかるメンバーのみ参加するという食堂である。この語りから、従来の誰でもいつでもきてよいという「子ども食堂」ではないことは予測され、かなりプライバシーが守られた「場」とであると察することができた。

また東さんの「終結っていうのは基本的にないというのを前提に、長く関わっていくという感じです。」という語りは、東さんが社会的養護の対象者と関わる上で、頑強な意思が垣間見れる。つまり園所や学校に通園通学した園児・児童・生徒は必ず卒園卒業という区切りがあり、保育者や教員は、彼らに思いを馳せることはもちろんあるが、一旦ピリオドを打つ。また「相談」についても同様に「受理」し「終わり」があると語る。しかし東さんの関わりは「終結」という感覚はなく、限りなく細く長く付き合っていくという前提でこれからも関わり続けるという思いが、言葉ではさりげなく語ってくださったが、信念のようなものが感じられた。もちろん、関わり続けることができず、残念ながらそのまま来なくなる方もいるという。定期的にサロン来る人、突然連絡が入ったり、ふらっと来る人がいたりなど様々なようであるが、「…（中略）…そのうち来るのかと思ったりもします。」とも語り、お互いにどうしているのか案じているのだろうとのことだった。

東さんは、「終結」のあるサポートとして家庭支援総合センターの職員の方たちとの連携もあるという。一人だけではできないサポートをコラボという形で連携し取り組んでいる。そして他の連携者として元学校教師である片山さん（仮名）について語った。片山さんの自宅はお寺であるという。東さんはその方の活動について、特別な支援をされているというわけではなく、一人ひとりのサポートを当たり前に入力、共に過ごされていることについて「個別のサポート」「別に普通に」という言葉で表現した。この語りを通して、思いが通ずる人たちとのつながりを大切にしていることが伝わってきた。

加えてこのサロンにくる人たちについて、東さんが若いころ関わっていた子どもたちが大人になり、彼らの「ライフステージ」における様々な「ライフイベント」が一般の人たちが抱えるイベントとは少し違って大変であることを語った。もともと虐待が原因で施設に入っていた子どもが大人になり、自分の親とは離れて暮らしていたにも関わらず、今度はその親を世話しないといけない状況に陥った際のことを語った。子ども時代の辛い経験がありながらも、今度は親のことをどうするか考えないといけなくなり、一緒に住んでみたが、やはり認知症などになった時には一緒に住めない、施設に入れるのか、入れないのか、自分がされたことと同じことをするのか等、どうすべきかを彼らは考えることとなるという。

世間一般には、多くの人が向き合うこととなる親の死と同時に「葬式」や「相続」の話があるが、それに加え、負債を抱えていたという現実がふりかかることもあるという。身内や親族とも縁遠いにも関わらず、一人で抱えなければならない状況に陥る人に対して、もちろん弁護士によるサポートは可能であるが、年齢が上が

るにつれ大変なライフステージを迎える人たちの心理的状况を考えると、なんとも言えない心情を東さんは吐露していた。東さんとの関わりは、子ども時代から大人時代へ突入した人たちが、結婚し子どもが誕生し、また当時の思いが蘇り不安定になるという「終結がない」関わりを改めて実感していた。

次に東さんは、自身がどういうタイプの人物なのかを謙遜しつつ語っている。関わり続けている人たちに対して、実際は「考えている」と想像できるが、「考えないようにしている」と語り、その代わりに周りの関係者（世話をする人）が「よく考えていただいています」と答えた。またその関係者とともに支えていく中で東さんの役割や期待されていることは何か問うと、再び自身を「物事が続かない」「ねばり弱い」と自己評価し、一方でサロンは「確実に毎月開催する」というルールを課していた。また大学院の指導教官の勧めで自分は希望していなかった児童相談所で勤務することとなり、その後新設の施設での採用が決まり勤務されることとなるが、ここでも「主体的には動いていない」と当時の思いを語った。特にこの語りにおいて、東さんは今まで自分の意思ではなく他者の勧めでキャリアを積んでいるので主体的に動いた経験はないのだと丁重に言葉を選んでいった。

東さんが、高校教員で担当していた生徒たちの現状は生活環境・学習面において大きな差があったという。有名進学校と3分の2が中退していく高校で同時就任であったため、多様な生徒の現状を見て、自分自身がもう少し勉強をしなればと思い、大学院進学の道を考えたとのこと。そこで指導教員が児童相談所関係であったということもあり、教育の現場から児童相談所での勤務となったという。「ついた人が判定

員だったんで、児童相談所に、っていう話になっていったというか、という言葉から、この語りの中でも自身が決めた道ではなく、たまたま「ついた人が判定員」という言葉で自分の強い思いからではないことをあえて強調しているかのようだった。

次に東さんのサロンでのタイプに関連してスタッフの在り方について語られた。サードプレイスには多様な運営があるが、ご自身のサロンは、いつでも見学に来てもいい、入ってもいいというタイプではないという。またこのサロンが会員制のような形式を取り、一人ひとり丁寧に関わりサポートすることが重要となり、その場が利用する人の「居場所」となっていることが前提であるため、誰でもスタッフとして来てもよいというスタンスではないと語った。どのような活動においても「守秘義務」は大前提ではあるが、特にこのサロンでは何らかの「トラウマ」を抱えて来られる方が多いことから、そのきっかけや要因を理解した上で配慮をする

必要があると説明された。またこの個別の配慮の必要性を強く語りながら、1度の参加人数（スタッフと来られる方）についてはおおよそ若い人2名に対し大人1人の割合で15名程度（最近多くて20名近く）で調整されているとのこと。

物的環境からも人数の制限をしなければということもあるが、個別の配慮などの点からも理由としてあげられるという。具体的には、以前に同じ施設で生活していて当時からトラブルがあったりなど、人間関係の視点から個別の配慮等があることをデリケートではあるが、関わる側として共有できることはしておかないといけないということからも事前の打ち合わせは必要であるとのことだった。

東さんは自身のサードプレイスと他のサードプレイスと違う大きな点は共通性のあるコミュニティであるということ、つまり来られる方の背景が細かく知らなくてもピアグループのよう

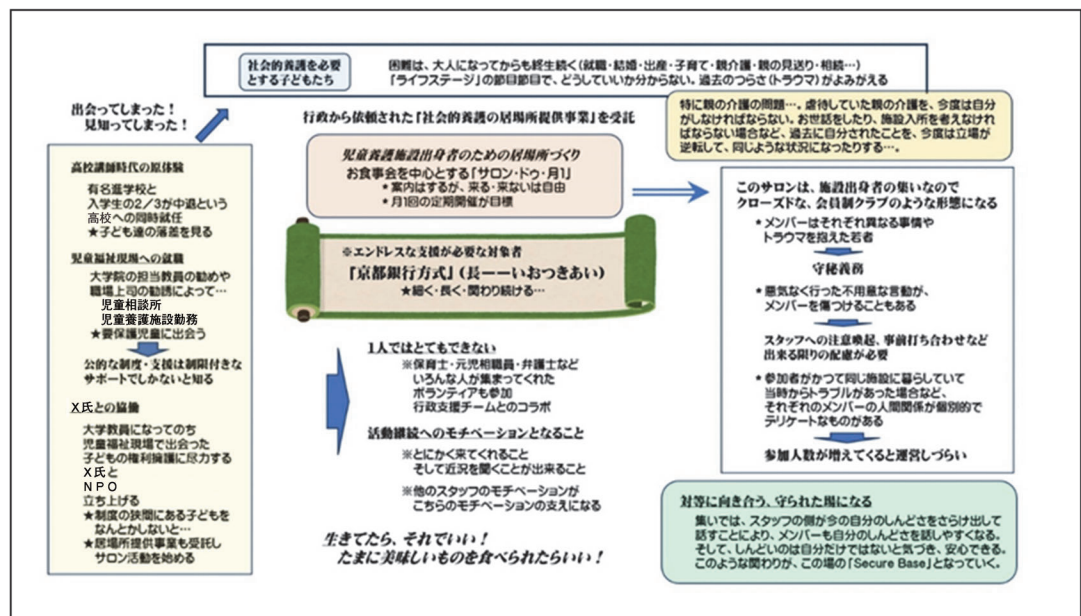


図2 東さんのサードプレイス構築過程

な形式となっている。よって、他のサードプレイスのような多様な方が自由に来られるところはより難しいのではという感想を語っていた。また彼らからの影響については、スタッフ側も今の自分のしんどさをさらけ出し語ることで、皆が自分のしんどさを話しやすくなり、しんどいのは自分だけではないと気づくことにより、心理的な安心を見つめることができるという。よって人数が増えると丁寧な関わりが難しくなるため、顔がわかる、名前がわかる人たちの間で運営しているという。このような関わりがこの場の「Secure Base（安全基地）」となっていくということが、東さんの語りから理解できる。

2. 西さんの事例

① 西さんについて

西さんは、家族の教育方針のために、幼少期から私立学校に通って育つ。そのために「近所に友達がいらない」「友達と遊ぶには、バスに乗って出かけないといけない」という事を、子どもの頃に寂しく思っていたという。

大学卒業後に幼稚園教諭として長年勤務し、結婚・出産を迎える。この間に、妊娠6回、そして流産を繰り返し、その時期に不安感や孤立感が高まったという。

このようなご自身の思いや経験から、1994年に子育てサークルを立ち上げた。また2006年からは大学教員として活躍し、ご自身の勤務や子育て経験を通した学びを学生達に還元されている。また大学教員として勤務する傍ら、サークル運営は継続し、2011年にNPOを設立し、現在も理事長として活躍されている。調査者とは、元幼稚園教諭であり、現在も教鞭をとりながら地域の子育てに関する活動を運営している方がいるという紹介をうけ、2年となる。調査者の地域活動の話をした際に、「それ、面白い！

大事なことやね！話しかせて」と西さんが笑顔で興味関心を抱いてくださったことが、今回のインタビューにつながった。西さんと知り合ってからまだ年数としては短い、いつも笑顔を絶やさず、前進していこうというポジティブ思考で行動力のある人物である。また長年活動の運営をされているにも関わらず、「教えてね」というスタンスで質問されたり、常にご自身でアンテナをはり新たな情報を得たり学ぼうという姿勢を崩されることがない。また互いの活動への敬意と今後も継続する必要があるという強い思いが常に交わされることにより、良い意味での刺激となっている。

② インタビューの概要

【「地域」ということ】

子どもの頃、近所に友達がいらないということがとても寂しく、同世代の子どもたちが地域の学校に通学していることを羨ましく思った記憶があり、「地域」という言葉にすごく憧れがあった。何か友達と遊ぼうと思っても、私の場合は、電車バスで乗り継いで誰かに迎えに来てもらって、おうちに行っていた。友達とも自由に遊べなかった環境だった。

【出産後に再びよみがえってきた、「地域」ということ】

自分の子ども時代の経験から、自分が子どもを育てるときには絶対に公立で育てようって強く思っていた。「地域の中で育つ環境を子どもたちに作りたい」「中学までは公立に通わすんだ」という思いがずっと心にあった。

出産後、忘れていた「近所」「地域」という言葉がまた思い出された。地域に知り合いがいらない。生まれてからずっと同じ地域に居住しているのに、地域に知り合いがいらない。出会って喋れる人もいない。もちろん相談できる人もそ

んなにいなかった。

それでも子どもをベビーカーにのせて町を歩いていると、声かけてくれる人がいた。「なんかすごい嬉しい」「なんかこういう環境って新鮮！」そんな感じだった。

【妊娠中に会った隣人】

その後、つわりがきつく、精神的にもしんどかったので、1か月ほど仕事をお休みさせてもらっていた時に、同年齢の子どもを育てている隣人に偶然出会った。隣人は「西さんが家にいるの珍しいね」と声をかけてくれた。「なんかつわりでしんどくって」と話すと、「そうなんや、昼間みんなで集まってるから、おいで」、「お好み焼きをみんなで食べて遊ぼう」と誘われた。「もらったキャベツあるし、持って行くね」と答え、子どももつれて出かけたが、その出会いは私にとって大変大きいものだった。

0歳～3歳ぐらいの子どもが参加していた。子どもは子どもの世界で遊んでいて、大人は大人でお好み焼きを焼きながら色々な話をするだけだった。しかし、それぞれの近況を話しているだけではあるが、とても共感することが多かった。

【目からうろこの体験】

集いの場で、それぞれの意見や話を語ると、「それ参考になるわ」「うん！」と返ってくる。泣いている子どもがいたら、隣のおばちゃんやお母さんが、よその子を普通にかわいがる。だから親同士の横の繋がりと子ども同士の社会の横の繋がりが、そして様々な斜めの関係性ができて、「これすごい」と心から思った。

私は幼児教育の現場にいたので、子どもは、家庭や教育の現場で育つという大きな勘違いをしていた。もちろん、家庭と教育、保育、地域っていうのは何となく概念としては知っていた

が、自分の中で地域というのがあんまり実体験がなかったこともあって。もうこれは、めちゃくちゃ大事。目からうろこの体験だった。

【子育てサークルの立ち上げへ】

このまま職場に戻るよりも、退職して、こういう居場所作りをできたらいいなと思った。また、小学校区には学童や児童館がなかった。今保育所に通わせて、後2年で卒園する。その後どうしたらいいのかと考えて…。

学童がつくれるかどうか市役所に電話をした。担当者は「土地があればつくっていい」という回答。しかし、お金も土地もないので諦めるしかなかった。

その時、サークルを作るという手があるとあって、2人目が1歳のお誕生の時に、「子育てサークルA」を始めた。インターネットがない時代なので、手書きでお手紙を書いて、保健所とかに持っていったり、あとは口コミで。口コミで40組集まった。

【子育てサークルA】

毎週1回午前中に集まる形式で開始。登録制にし、毎月お便りを配布。月の終わりには翌月の予定も配布。90年代はなかなか集まる場所がなかった。狭い部屋を2室借り、きょうだいの参加もあると200名近く集まることもあった。

コミュニティがある人たちはなんか楽しそうで、1人で3年間頑張ってきた人と、その子どもの3年間の育ち、親の精神衛生上の解消とかいうことを考えたら、出会いが地域にあることが断然いい。「居場所」、必ずこの日に来たら誰かと出会いますよという場所。これは絶対にもう社会問題だと思う。

サークルの運営は、私の職業柄、毎週の計画など問題なく立てることができたが、それを続

けると全員が私を頼り、提供者と参加者という関係になってしまうことに違和感をおぼえた。改めてその場に参加されている方たちの中から、一緒に運営する人を募り、皆が役割を担うことで、参加者自身の「居場所」意識が高まってきた。

【支援の推進から、居場所の共有へ】

そんな居場所が自分の住まいの近くにあるの？ あったら参加したい！と問い合わせがたくさん入るようになり、情報をとりまとめて発信したり、居場所がなければ立ち上げ支援をするネットワークをつくろうと動き始めた。やることが次々湧いてきて、時には自分の強い思いで突き進むことがあった。もうやろうと思ったら、周りの迷惑顧みず、やりすぎて怒られたりすることも。周りからは「なんかもう乗った電車が止まらへん。新幹線なんやけど。降ろしてー」「降りたいけど止まらへん」みたいな感じで言われたこともあった。スタッフの本音をしっかり聴き、改めて自身を省察し、彼らに感謝をするようになった。そしてスタッフには、活動に対し楽しさを感じながら自分の居場所と感じてくれることを期待した。

【運営の中で大切にしていること】

人がやっていることを、やらなくていいと思っている。人がまだ手をつけてないところで、何か自分のキャパシティーの中でできることをやろうと思っている。だから、立ち上げたら、もう譲っていきます。立ち上げまでは頑張って、立ち上がったらもう施設長に譲る。というか、「やってね」という感じ。その人と一緒に二人三脚で動きつつ、しかし、そこの現場はもうお任せしていくので、無責任といえば、無責任なのですが。

お任せする人がちゃんとしている。スタッフ

みんな素晴らしくて、私なんかよりも本当にいろんな配慮もできるし、もう素晴らしい。手前味噌ですが、本当にすごい人たちが集まってくれています。

そして、やれること見つかったら、もうわくわくしています。またそっちを向いて走っていく、また事業が増えるみたいな（笑）。でもそれは楽しいし、私にとっても楽しい。これ社会的に絶対必要、しかも資源もあるから「ゴサイン」みたいな感じで。

万一、私にやらされているという思いのスタッフがいたらやっぱり嫌だし、別にやらせるために頑張っているわけでもない。そこにやりがいを感じて、自分自身の成長も感じて、もちろんそこに来たいろんな利用者さんをこの場にこれてよかった、スタッフと出会えてよかった、仲間と繋いでもらえてよかったという思いがあれば…。みんなが笑顔にならないと、やっている意味全くないので。

【更なる拡がりをめざして】

これからは、他職種との関わりや、自分の団体以外の関わりが大切。向こうが何をしたいか、何を求めているかということと、我々の思っていること。お互いのあるものとないものとが重なったらお互いにとってプラスですし、それぞれあるものを提供しあっているものができたというイメージを大切にしている。地域や企業、そして行政と話し合うときも、同じ広場の同業種の方ともそうです。

私自身が直接関わることはもちろんあります。一つの事業を作り上げるときに、コーディネーターもしますし、特に行政とかのパイプ役にはなっているので、そこは丁寧にやっていかないとね。現場ができるまでいろいろな繋がりがないとできない。うちの団体の中だけでもできることももちろんあるけれども、やはり広が

らない。集いの広場とか、広場がない時間帯にも他の資源と繋がってもらったり、いろんな人と繋がってもらわないと。1ヶ所の場所だけじゃ、生活って豊かにできないので、何かそこを繋ぐっていうのはすごく必要なと思っています。

【ご自身の役割】

行政とのパイプ役とか。収入が安定するように。働きやすい環境とかも考える。みんなは質の良い支援がしたいと思ってるので、質の良い支援をするための組織の環境を整えて欲しいというのはすごく求められているところです。

更に、今の現状から言えば、一生懸命勉強して事務局をやってくれているので、もうその方に任せることができたらどんなに楽だろうと思っています。発信力とか事務力とか、そこはすごく必要です。そして、企業と対等に喋れる人とかも。

③ インタビュー分析

インタビュー結果から、西さんのサードプレイスの構築過程をまとめたのが図3である。インタビューから、以下のことを読み取ることができよう。

西さんは、小さいながらに自分だけ制服を着て登校することが特別であるということは認識していたが同世代の子どもたちが地域の学校に通学している羨ましいと思っていた。それもあって、自分が子どもを育てるときには絶対に公立で育てようって強く思っていたとのこと。「地域」という言葉への憧れと、地域の中で育つ環境を子どもたちに作りたい、中学までは公立に通わすんだという思いもずっと心にあったという。その思いをもったまま幼稚園教諭となり、結婚し出産。出産後、幼少期に感じていた「地域」への思いがフラッシュバックする西さ

ん。結局大人になった今も、地域に知り合いがいないことに改めて直面する。そのような思いを抱えながら子育てしていると、出先で知らない方から声をかけられたことが新鮮であり、感動さえ覚えた。次の妊娠では体に不調があり状況的によくないことが続いた。誰のせいでもないが精神的にも辛いことに加え、つわりもきつく、1か月ほど仕事を休みさせてもらったという。その時に同年齢の子どもを同じ育てている隣人に偶然会ったという。その出会いは西さんにとって大変大きいものだったという。他に5・6組の親子がおられ、当時は2年保育が主であったため、0歳～3歳ぐらいの子どもが参加していた。子どもは子どもの世界で遊んでいて、大人は大人でお好み焼きを焼きながら色々な話をするだけだった。しかし、それぞれの近況を話しているだけではあるが、とても共感することが多かったという。

この場に来ている子どもや大人の横の繋がりを斜めの繋がりを目の当たりにし「目から鱗だったところが、本当の意味でのスタートだった」と西さんは語った。そして、二人目の育休中に改めて今後について考え直すことになる。

仕事をする親にとっては卒園後直面するのは、学童問題。西さんは、このままでは働き続ける道が見つけられないことを認識する。そこで、市に学童がつくれるかどうか市役所に電話をした。担当者は「土地があればつくっていい」という回答。お金も土地もないので諦めるしかなかった。当時は、長年憧れていた地域で、一緒に子育てできる仲間のコミュニティという言葉はなかったが、80年代終わりから90年代にかけて育児雑誌にも全国の子育てサークルという言葉が出だした時代であったという。

西さんが語った80年代終わりから90年代は、子育て支援が問われる時代でもあった。1989年は、日本において「(合計特殊出生率) 1.57

ショック」が起こり、本格的な少子化対策の必要性があった。子育て（のちに、子育て・子育て）支援が問われる時代の幕開けでもあり、子どもの育ちやその支援を考える新しい時代が始まった頃であったため、西さん自身もまさにその幕開けとともにサークルをつくる意志が固まったと言えるだろう。

西さんは子育てサークルAを立ち上げ毎週1回午前中に集まるという形式で開始した。登録制にするなど、毎月お便りを配布し、月の終わりには翌月の予定も配布するようにし毎月そのお便りを確認し参加があった。また90年代はなかなか集まる場所がなかったのも、多くの方が場を求めていたかのようだった。狭い部屋を2室借り、兄弟の参加もあると200名近く集まることもあったという。また、職場復帰した際に母親たちに一人目の子育てはどうしていたのかを質問したそうだ。その結果、幼稚園に子どもを入園させて初めて他の母親と話をしたという「孤立派」と、毎週生協などを利用するなど地域住民との関わりがあった「子育て地域派」に分かれていたように感じたという。

西さんは職業柄、毎週の計画など問題なく立てることができたが、それを続けると全員が私を頼り、提供者と参加者という関係図となってしまうことに違和感を感じていた。子育てを一緒にしようという思いが最初であったため、改めてその場に参加されている方たちの中で一緒に運営する人を募ることで、皆が役割と参加を作ることで、参加者自身が「居場所」意識が高まってきたとのこと。その活動が新聞記者の目にとまり、取材があったがその後1か月メールがない時代だったので、電話がなりっぱなしだった。毎日誰とも話をしていないという、悲鳴に近い声を聴くことにもなった。その後口コミ情報誌や何かの冊子の口コミ欄などを中心に

居場所を必要とする人たちの声を収集すると30件ほど情報が集まったという。しかしながら手紙でこのようなことをしているので集まらないかと招集しても、送付した半分は宛名不明等で戻ってきたり、入園ができたので居場所探しはやめていた。その現実を見て西さんは「情報って生もの」とであると気づき、誰かがしっかり管理しながら上書きされないと、役に立たない情報であるということを感じたのである。一方で、集まってくださった方々とは一緒に子育てネットワークを立ち上げないかという提案をし、新たな子育て支援のネットワークが設立した。これまで活動を立ち上げてきている西さんであるが、特にお連れ合いはノートタッチであったことについて有難かったという一言があった。信頼関係が築かれているからできたということと、リスクなどを示されていたら何もできなかっただろうとのことだった。言葉はなくとも、家族の理解があってこそ一歩が踏み出せたのだろう。一人の思いや意気込みだけでは、立ち上げることはできなかったということも読み取れる。

西さんは活動を運営していく中で、自身の強い思いで突き進むことがあったが、スタッフの本音をしっかりと聴き改めて自身を省察し、彼らに感謝をするようになったという変化もあった。そしてスタッフには活動に対し楽しさを感じながら自分の居場所とじてくれることを期待した。西さんは加えて、「やれる人がいるときはしない。やれる人がなければもちろん代わりにやっていくというスタンスである」と語り、活動を新たに考えることの喜びや楽しさをスタッフとともに感じることを意識していた。多職種連携に関しても、相手の思いをまず聞き丁寧に聞きながら互いに歩み寄ることの大切さを忘れないということ、そして「つながる」こ

どもの居場所づくりコーディネーター（仮称）」の配置等支援や、NPO 等と連携した子どもの居場所づくり支援（モデル事業）など、子どもの居場所づくり支援体制強化事業としてこども家庭庁から提示されたのである。その中でも課題である「多様な居場所を増やすこと」の対応策として「地域のニーズを把握し、居場所づくりの担い手を含む資源の発掘・活用や、地域づくりとの連携など、地域の居場所全体をコーディネートし、多様な居場所を確保する人材が必要」と示した。こども家庭庁が示した課題や提言から、筆者が2023年度から開始したサードプレイスを構築し運営する人材養成プログラムを省察し再考するため、実際にサードプレイスに尽力する人たちのライフストーリーに迫ることにより、運営・実践の継続に資した要因とは何かを明らかにすることを試みた。東さん、西さんのインタビューより、二人の活動に関わる運営方法や対象となる人たちは異なっており、東さんのような支援者、受益者とともに活動に関わる伴走型タイプの人材、西さんのような地域のニーズをいち早く収集し、問題解決のための企画提案型タイプの人材とも分けられるかもしれない。よってサードプレイスに必要な人材は必ずしも決まっているものではないことは明らかとなった。しかしながら、語りを丁寧に読み解き、彼らのライフストーリーを可視化する過程で、受益者である利用者と一緒に活動するスタッフの声を傾聴し受容すること、スタッフ自身が「やりがい」を感じながら主体的に動いてもらえるよう、黒子としての立場を貫く姿勢を持ち備えた人材であることは共通していた。決してトップダウンではなく「共にいること」、またチームで振り返る時間を持ち、実際に活動や課題を話し合い、視覚化することもサードプレイス運営に必要な要点であるということがわかった。そしてサードプレイスが互い

から学びあい変化し続けるという互恵的な場、かつ終わりのない支援であることを認識することがサードプレイスとして継続できる要因であろう。現在の日本において、子どものみならず、大人を含めた多世代・多文化な観点からサードプレイスを構築し、質の高い人材を養成していくことも、子どもや大人のサードプレイスの整備のためには重要であると考ええる。

【参考文献】

- 大久保孝治（2009）『ライフストーリー分析—質的調査入門』学文社。
- 小林重人・山田広明（2014）「マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究：石川県能美市の非常設型「ひょっこりカフェ」を事例として」『地域活性研究』5、3-12。
- 桜井厚（2012）『ライフストーリー論』弘文堂。
- 杉浦彰子（2024）「質的研究法を用いた高齢学習者のライフストーリー分析—人生の出来事とその意味づけの変容に着目して—」『共済総合研究』88、23-42。
- 高谷邦彦（2019）「サード・プレイスとしてのTwitter - 子育て主婦ユーザの場合 -」『名古屋短期大学研究紀要』57、1-13。
- 田中治彦・萩原建次郎編（2012）『若者の居場所と参加——ユースワークが築く新たな社会』東洋館出版社。
- 中尾元（2021）「ライフストーリー研究の方法論—認識論（epistemology）としての人文×社会科学の交差点」『人文×社会』1（1）、125-137。
- 中藤信哉（2017）「心理臨床と『居場所』」創元社。
- 那須野隆一（1976）『青年団論』日本青年館。
- 日本建築学会編（2010）『まちの居場所』東洋書店。
- 日本建築学会編（2019）『まちの居場所—ささえる/まもる/そだてる/つなぐ』鹿島出版会。
- 萩原建次郎（2018）『居場所——生の回復と充溢のトポス』春風社。
- 柳下換・高橋寛人（編）（2019）『居場所づくりに今必要なこと—子ども・若者の生きづらさに寄りそう』明石書店。

【URL】

1. こども家庭庁（2024）「社会的養護とは」

<https://www.cfa.go.jp/policies/shakaiteki-yougo>

【外国語参考文献】

- Cheang, M. (2002) Older adults' frequent visits to a fast-food restaurant: Nonobligatory socialinteraction and the significance of play in a third place. *Journal of Aging Studies*, 16, 303-321.
- Crick, A. P. (2011) Rethinking Oldenburg: Third Places and Generation Y in a Developing Country Context. *International CHRIE Conference*, 1-22.
- DeCava, M. (2006) Working out of a 'third place', USA Today, 18 Ocak 2014 tarihinde, (Retrieved from http://usatoday30.usatoday.com/life/2006-10-04-third-space_x.htmadresinden erişildi).
- Fournier, S. & Lee, L. (2009) Getting Brand Communities Right. *Harvard Business Review*, 87, 105-111.
- Goffman, E. (1971) *The presentation of self in everyday life*. New York: Anchor Books.
- Jeffres, L. W., Bracken, C. C., Jian, G., & Casey, M. F. (2009). The impact of third places on community quality of life. *Applied Research in Quality of Life*, 4, 333-345.
- Lee, CS., & Ma, L. (2012) News sharing in social media: the effect of gratifications and prior experience. *Computers in Human Behavior*, 28 (2), 331-339.
- Mehta, V. & Bosson, JK. (2010) Third places and the social life of streets. *Environment and Behavior*, 42, 779– 805.
- Mikunda, C. & Blomen, A. (2006) *Brand lands, hot spots, and cool spaces: Welcome to the third place and the total marketing experience*. London: Kogan Page Publishing.
- Oldenburg, R. (1989) *The great good place*, New York: Marlowe & Company. (=2013、忠平美幸訳『サードプレイスーコミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房。)
- Oldenburg, R. (1999) *The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons, and Other Hangouts at the Heart of a Community*. UK: Marlowe.

Rosenbaum, MS., Ward, J., Walker, BA. & Ostrom, AL. (2007) A cup of coffee and a dash of love: An investigation of commercial social support and third-place attachment.

Journal of Service Research, 10, 257-267.

Slater, A. & Koo, HJ. (2010) A New Type of "Third Place"? *Journal of Place Management and Development*, 3, 99-112.

Steinkuehler, CA. & Williams, D. (2006) Where Everybody Knows Your (Screen) Name: Online Games as "Third Places". *Journal of Computer-Mediated Communication*, 11 (4), 885-909.

Wechsberg, J. (1966) *The Viennese Coffee House: A Romantic Institution*. *Gourmet*, 12, 16.

【URL】

1. Archer C. (2017) Mums and social media : The everyday, digitised 'third place' for mothers in Australia. WACCM "Gender and the Everyday" Conference Organising Committee, (Retrieved on December 2, 2023, https://www.academia.edu/64214913/Mums_and_social_media_The_everyday_digitised_third_place_for_mothers_in_Australia?email_work_card=title).